



## 地域情報化に関する3つの思い

広岡 淳二

(一社)九州テレコム振興センター (K I A I) 事務局長

### ー地域情報化とは将来のまちづくりのデザインー

地域情報化の役割とは何か、という漠然とした問いかけに対し、私自身はいつも、それは「将来に向けたまちづくりのデザインのひとつである」、という回答をよくしています。これまでも色々な地域に出掛け、情報化関連の仕事をさせていただいてきていますが、たまに情報化そのものが業務の目的となっているようなシーンを時々見かけます。前述したように、情報化とはまちづくり（地域づくり）のひとつの手段に過ぎず、地域情報化施策があまりうまく機能していない場合の理由とは、そもそも「明確なまちづくりビジョン」が描けていないことによるものも多いと、常々思うところです。明確なまちづくりビジョンを達成する手段のひとつとして地域情報化がある訳ですが、当然ながら、情報化を必要としない、あるいは敢えて情報化を持ち込まない、という手段も一方であると考えられます。

一方、地域情報化施策そのものの意義について考えてみた場合、色々な見解はあると思われませんが、個人的にそれは、「無駄をなくし地域の総合力・魅力を高めていく（別の言い方をすれば差別化する）」ことにあると考えています。そういった関係で、

**「システムとは、共有部分はできるだけ大きく占有部分はできるだけ小さく」**

**「コンテンツとは、共有部分はできるだけ小さく占有部分はできるだけ大きく」**

といったようなことを、地域でよくお話しさせていただきます。いかがでしょうか、意外とこの逆の現象が起きているところも多いのではないのでしょうか。

地域におけるICT利活用が大きな課題となっている現在、具体的な情報通信システム・サービスの導入をいかに進めていくか、というプロセスにまずは陥りがちです。もちろんそのことも大切なことなのではありますが、今一度、地域にとって情報化とは何か、といった点に関して、より幅広い目線で議論をしていく必要がもっとあるのでは、と思っています。

### ー地域情報化に至る近道はなしー

そのような背景から、現在、K I A Iでは、平成22年度より「九州地域 ICT 利活用調査研究活動」という事業を進めてきています。これは、「一定の地域に入り込み、当該地域の方々と一緒に一定期間継続して情報化関連事業を推進していく」という、シンプルな内容の事業です。この事業をスタートさせた理由は、(これまでの普及啓発事業の通例である)一過性のイベント事業だけでは、地域での利活用促進はなかなか進展しない、という感想からです。地域にとって本当に必要とされているICT利活用とは何か、といった一番基本であり、一番難しいとも思われる課題に対し、地域の方々と一緒に考え、地域ならではのICT利活用の取り組みを模索していく大切さを痛感したからです。と言うと、何か大それた事業をしているような印象にも聞こえるかもしれませんが、行っている事業自体は、次のとおり、特段目新しい内容のものではなく、実はどの地域でも普通に行われていると思われるようなものばかりのものです。

- ◆地元住民の方々とのタウンミーティング
- ◆(小規模)インターネット教室、相談会
- ◆住民アンケート調査
- ◆セミナー、シンポジウム
- ◆インターネット動画配信実験 等



【タウンミーティング風景】



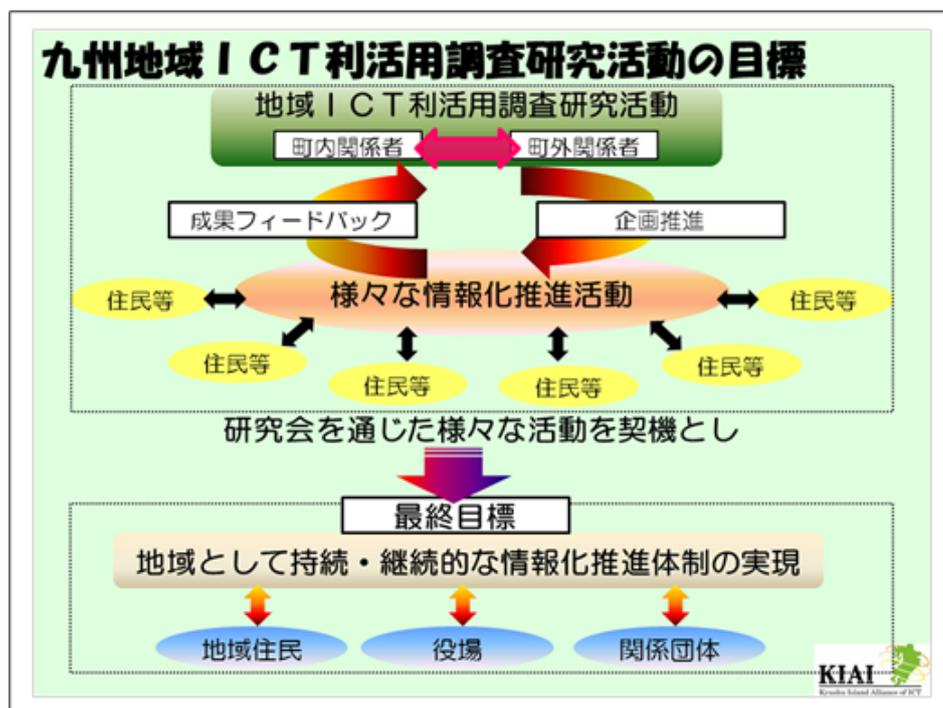
【インターネット教室風景】

こういった活動を、平成22年度の事業開始以来、これまで、鹿児島県肝付町、佐賀県佐賀市富士町、熊本県湯前町、福岡県添田町、という地域で展開してきました。(平成25年度から新たにもう一か所新規追加予定)これらの活動地域の中、最初に取り組んだ地域である肝付町では、町内関係者自らの手によって、地域情報化を牽引していくNPO法人「きもつき情報化推進センター」を平成24年度に立ち上げるまでの成果を生み出すことができました。

活動当初、「K I A I とは何者？」という目線で見られていました。最後はこのようなNPO法人の立ち上げと併せ、町の総合的な情報発信機能の創出、町民に対するリテラシー向上に向けた取り組みに関しても、それぞれ具体的な事業を確立させることができ、いずれもこのNPO法人が担い手となり推進していくこととなりました。このような肝付町での活動成果を、我々の間では「きもつきモデル」と呼んでおり、現在活動している他地域にもこの成果を上手く応用していきたいと思っています。このきもつきモデルとはいわば、K I A I における九州地域 I C T 利活用調査研究活動が目指していた下図のようなスキームを具体化したものといえます。



【きもつき情報化推進センター発足式風景】



繰り返しになりますが、我々はこの成果を挙げるに際し、特段、新しい類の利活用推進事業を行ってきた訳ではありません。もし、他地域の例との違いがあるとすれば、

- ◆継続性を持った活動展開
- ◆K I A I という「よそ者」と「地域の方」が一体となった活動展開

といった程度の内容ではないかと思えます。

もちろん、肝付町関係者の方々の熱意というものが根底にあったことも大きな要因です。このように、地域情報化に効く特効薬とは実はなく、地道な腰を据えた活動のうえにたつてこそ、初めてその成果が生まれるものではないかと、個人的には考えています。地域情報化に近道なんてないのです。

### －「地域のICT屋さん」をつくっていこう－

その地道な活動の原動力とは、まさに「このまち（地域）をどういう姿にしていきたいのか」という思いであり、そういう思いと情報化を上手くマッチさせていく役割を担う地域情報化アドバイザーのような機能は、今後ともますますその重要性を増してくると思います。そのアドバイザー業務も多岐に及んでくると思いますが、一番身近なところでは、それは「街の電気屋さん」と同様、「街のICT屋さん」のような存在ではないかと思っています。K I A I で取り組んでいる上記の活動は、ある意味当該地域にそんな「街のICT屋さん」をつくっていこうとしていることなのかもしれません。将来的にそういったICT屋さんが地域の枠を超え、より広域的な活動を展開できるようになれば、九州の地域情報化は、今以上に面白い展開が見えてくるのかもしれません。我々の活動は第一歩をスタートさせたばかりですが、いつかそういう時が来ることを心から願いつつ、これからも頑張っていきたいと思っています。

私の話は以上です。

K I A I（九州テレコム支援センター）では、九州地域におけるICT利活用に関する様々な支援活動や、九州各地でICT利活用に関するセミナー、研修会等を実施しています。九州の各自治体の皆さま、何かあればお気軽にご相談ください。

さて、次回のリレーコラムは、畑井克彦さんです。

畑井さんは教育のプロとして、若者とともに地域を元気にした取り組みを紹介いただけると思います。

それでは畑井さん、バトンをお渡しします。よろしく申し上げます。